

素顔のご入居者 第四十六回

短歌と随筆を友として

鈴木 秀子様

日々の何気ない風景を歌に詠み文字に紡ぎ心豊かに暮す鈴木様。そのまっすぐな眼差しで何を見てきたのか伺ってみました。

●あだ名はメリーさん

私は「保健室の先生」として三十年以上を男子校の保健室で過ごしました。その頃新聞に連載中の四コマ漫画の登場人物になぞらえて付いたあだ名が「メリーさん」。退職までずっとメリーさんと呼ばれました。



▲素敵な笑顔の鈴木さん

どの子も皆可愛い生徒達でした。オルゴールの宝石箱を贈られたり、

街角で「メリーさん」と声をかけられ振り返れば大人になった懐かしい顔、なんて嬉しいことも。

●書かずにはいられて…

私が筆を執るようになったのは二十代。戦後の喪失感の中何か書かなくては心まで空っぽになつてしまいうでした。以来私の傍らには歌と文があります。

幼い頃はお転婆で兄や弟と裏山を駆け回って遊びました。思えば平和な時代でした。その後戦争が始まり、当時女学生の私達も軍需工場などで懸命に働きました。焼夷弾の中を必死に逃げ、私は生き残り親友は帰らぬ人に。そして女学校を卒業した私は看護師として日赤病院で数年間勤務しました。メリーさんと呼ばれる前の事です。今も忘れられない小さな男の子がいます。あれは

当直の夜でした。容体急変の緊迫した中、すでに回らなくなった口で「ジュース…」とせがむのです。私達は最期の願いを叶えてやれず、たつたひと口ジュースを飲む事すら叶わぬまま五歳の魂は旅立ちました。窓辺にはジュースの缶が悲しく並んでいました。この夜の事は心の棘となり今も抜けません。

●メタセコイアのある我が家

ゆうゆうの里には大好きなメタセコイアの大木があります。



▲里のメタセコイア
短歌や随筆に登場することも

力強く堂々とした姿には勇気づけられます。私は毎月短歌と随筆を文芸誌に投稿しています。若い頃のようにキラキラしたものにはなりません、それでも生きている以上は書くべきだと思っています。

此処では朝を告げる放送とともに一日が始まり、ゆつくり時間が流れます。暑い夏の日にメタセコイアの樹の下をゆくカタツムリを見かけます。ワンルームの部屋を背負いコツコツ進む姿はまるで自分のよう。自然と笑みがこぼれます。学生時代のクラスメイトとは違う不思議な味わいの友もできました。

思えば小川をひよいと飛び越えるように此処を終の棲家と決めました。何事も深刻に考えすぎず与えられた場所で楽しめばいいのではないかしら。

食堂の隅に手招き

する友の

あればいそいそ

盆 持ちてゆく



▲毎月12首を
文芸誌「檜の木」に投稿